

「和魂洋才」とその行方（93・9・20）

藤沢 令夫（昭20・文甲）

何か話すようにと仰せつかって、どういうテーマがよろしいかといろいろ考えましたが、結局、このような題にさせていただきました。

「和魂洋才」という言葉からおそらく御推察いただけますように、日本は幕末・明治のころから鎖国を解いて、西洋の文明、西洋の学問や思想を積極的に取り入れることになりましたが、その受容のあり方がどうであったか、今日から振り返ってみてどのような問題点を含んでいて、それがその後の成り行きにどう影響したか、といったことを中心にお話したいと考えております。

ただその際、私自身はギリシア哲学をふまえて西洋の哲学を勉強している者でありますので、いま申しました日本における西洋の学問・文明の受容の仕方についての反省ということをし、受け入れた日本の側からだけでなく、受け入れられた西洋の学問・文明そのものの側からも——むしろそのほうにいくらか重点を置いて——考えてみたいと思っっている次第でございます。

さて、さしあたってはしかし、幕末に活躍した維新の志士たちに目を向けてみましょう。彼等はさしずめ、当時の代表的な知識人であり、文化人であったといつてよいでしょうが、しかし今日そのように呼ばれている人たちとくらべると、明らかにその教養の質が異なるように思えます。私がいま勤めております京都国立博物館にも、坂本龍馬が襲われて殺された時の血染めの屏風というのがあります、大へん人気があつて、それを目当てに来られる方も多いのですが、東山の霊山（りょうぜん）歴史館というところでは、ほぼ常時、テーマ的に幕末・維新の志士たちを讚えるという趣旨で展覧をやっております。先ごろも高杉晋作展というのがあります、見に行つたのですが、いつもこのような機会に志士たちについて圧倒的な印象を受けることが一つございます。

それは、例えばこの高杉晋作にしても、おびただしい数の漢詩をはじめ、和歌だとか、さらにはかの有名な「三千世界のからすを殺しぬしと朝寝がしてみたい」というような都々逸だとか、そういういくつもの、自分の心の中の思いを表現するための定型といえますか、感じるところ思うところを歌いあげる多彩な伝統的詩形式というものを身に着けていて、それを実に自在に使いこなしているという点であります。これはほんとうに感心せざるを得ない。それにまた高杉は、

武道のほうでも柳生新蔭流の免許皆伝の腕前ですけれども、彼ら当時の代表的な知識人・文化人は、このような文武両面にわたる非常に硬質の、かっちりとした手ごたえのある素養というものを身につけていました。これはちよつと、今日の文化人とか知識人には見られないところでしょう。

高杉晋作だけでなく、同輩の久坂玄瑞にしても、彼らの先生である吉田松陰にしても、そのまゝ先生に当たる佐久間象山にしましても、みな同じようなことが言えると思います。そこに何となく、やはり江戸時代は国を閉ざして中で実力を養っていたわけですから、先祖から脈々と続くものを踏まえた「魂」といったものが感じられるような気がいたします。

では、そもそも学問というものに対する彼らの態度はどうであったかといえますと、それは一口に言つて、実学という思想なのです。佐久間象山以下いま名前を挙げた人たちはみな、この実学という考え方をもっていました。実学の思想とは何かというと、要するに、学問は国家社会のために直接すぐに役立つものでなければならぬ、そのような実効性のある学問を求めよう、という考えです。

時あたかも十九世紀の半ばごろに当たりますが、彼らに代表されるこのような考えのもとに、日本は西洋の学問を積極的に摂取し始めることになったわけであり、おそらく日本人が初めて西洋の学問をはっきりと組織的に、また総合的な形で学習したのは、一八五十年代、長崎にあ

った海軍の伝習所と医学の伝習所においてでありましょう。最初に組織的に学んだ西洋の学問が軍事と医学であったということは、今日までの状況を考えてみますと、何か象徴的という感じもいたします。

それでは、こうして受け入れられることになった西洋の学問そのものは、この時点において、どのような状態にあり、どのような性格を強くもっていたでしょうか。つまり、西洋の学問というのは、紀元前六世紀の古代ギリシアに始まるざっと二千六百年にわたる長い伝統を持っていて、当然その間に、いろいろと紆余曲折と推移があつたわけですが、その結果として、ちょうど日本が西洋の学問を積極的に取り入れ始めたこの十九世紀の中ごろという時点には、どういふあり方をとっていたかということですね。そのことを考えてみるのが、その後の成り行きと今日の状況を省みるためには重要ではないかと、私としては常々から思っている次第であります。

二

そこで手続きとして、出発点以来の西洋の学問の歴史を、ごく大雑把にはございますがふり返ってみまして、少なくとも重要なポイントだけを推しておきたいと思ひます。西洋の学問は、紀元前六世紀の古代ギリシアに始まると見てよいでしょう。そのころタレス、アナクシマン드로ス、アナクシメネスといった人々によって始められた哲学と呼ばれる営為が、その後の西洋の学

問全体の母体であり、いろいろの学問分野が出てくる大本の根っ子となっていることは、疑いえない事実だからであります。

ふつう哲学史の教科書などでは、最初にいきなり「タレスは万有の根元（アルケー）は水であると言った」とありまして、ここから哲学は始まったと書いてあるのですが、これではあまりにも唐突でとりとめがありません。私もむかし中学生のころ、はじめて『西洋哲学史』——シュヴェーグラールという人の——を岩波文庫で読んだとき、万有の根元が「水」だとか「空気」（アナクシメネス）だとかいったことから哲学が始まるというのが、あまりピンと来ませんで、そのころの日記を見ると、「古代の哲学者は妙なことを考えたものだ」などと書き記してあります。

哲学の歴史をこういう記述で始めると言うのは、アリストテレス以来の慣習なのですが、しかし実は、同じアリストテレスが別のところで証言していますように、「水」であるとか「空気」であるとか言われた万有の根元は、彼ら初期の哲学者たちにとっては、そのまま「プシューケー」（いのち、魂）にほかならなかった、つまり、万有の根元は水であったり空気であったりするのと同時に、もしくはそれ以前に、より基本的にはプシューケーにほかならなかったのです。「生命」と「物質」といった区別は彼らにはなく、両者は一体的にとらえられていましたから、「水」や「空気」というのは、彼らにとっては、自然万有の根元であるプシューケー（生命、魂）が「物質的」（と私たちが呼ぶような）位相においてとる姿である、と申せましようか。

いずれにしましても、重要な点は、古代ギリシアの初期の思想家たちは、自然万有が——プシユケーを根元としているのですから——生きていますと考えていたこと、そしていわば小宇宙であるわれわれ個々の人間は、この自然万有の生命と魂を分けもっているのだと考えたことでもあります。

西洋の学問は、その淵源において、このような自然観と人間観から出発したのです。

ただ、このように自然万有の根元はプシユケーであり、したがって自然万有は生きていますという基本的な見方は、のちのちまで堅持されましたけれども、その物質的位相と先に申しました面については、すでにタレスの「水」とアナクシメネスの「空気」との間にも見解の相違が見られますように、それを何として特定すべきかをめぐって、きびしい論争がその後も続いて行きました。

その論争の内容は実に興味ぶかいのですが、いまは省略させていただきまして、とにかくそのきびしい論争の中で揉まれ鍛えられながら、紀元前五世紀の末ごろになって出てきたのが、原子論の自然観でした。

「原子」(アトム)とは、物を次つきと分割して行くと最後に到達する、もはやそれ以上分割できない微小粒子のことで、「アトム」のギリシア原語「アトモン」は「不可分なもの」という意味であります。原子論の考えは、自然万有とその個々の物や事象はすべて、最終的にはこの

原子を構成要素として、その結合と分離、離合集散によつて形づくられている、ということですから、原子の一つ一つは、空虚をまったく含まないがゆえに分割することができないというわけですから、原子とはそういう完全剛体というかたちでの、〈物〉の観念の理想化であり、完成であるといえましょう。

プシューケー（生命、魂）もまたそのような原子から——特別に微細で球形をした動きやすい原子ではありますが、とにかく〈物〉としての原子から——構成されているとみなされ、つまり〈物〉としての原子に還元されたわけですから、この原子論的世界観・自然観によれば、自然万有の根源はもはやプシューケーではあり得ないことになり、ここに、先述のようなギリシア本来の伝統的な自然の見方からの大きな原理的逸脱が見られます。自然万有の根源は、今やはつきりと、〈物〉なのです。

もともと人間にとつて、ある状況や現象を（例えば暴風雨、体のだるさ）をそのまま状況や現象としてとらえているよりも、その本体を〈物〉（例えば「台風何号」という雲の渦巻、一定の病原菌）の形で特定して、対処的のをそこに向けるほうが、はるかに有効なやり方でありますし、あるいは有効であるという以前に、人間が生き延び行動するために必須にして不可欠のことであると思われまふ。原子論は、これを精密化して理論的に整備した世界観・自然観でありますから、ギリシア本来の伝統からみれば大きな原理的逸脱であっても、別の意味では、人間の生き延び本

能に沿った考え方の線であるとも言えるのです。したがってまた、ちょうどそれに照応するだけの、事象説明にあたっての説得力をもっております。

卑近な例で申しますと、「この乳液は非常に肌を滑らかにします。なぜならこんなに細かい粒子から成っているのですから」と言って顕微鏡写真を見せられますと、なるほどそうかと納得するような傾向が、どうも私たちにはあるのですね。

ですから、少し後に出たプラトンも、このような説明方式を自然学の中で活用してはいますが、しかしプラトンは、そうした原子的な微小粒子はけっして恒久的な窮極の構成要素ではなく、不断の生成流転のなかで互いにパターンを交換しつつ現われる仮の姿にすぎないこと、自然万有の最も基本的な要因は活力としてのプシューケーであることを、論証にもとづいて証明しております。これは、自然万有の根元をプシューケーであるとして、その上で原子論によって一度成立した〈物〉の観念を相対的に位置づけているという点で、最初期からのギリシア的自然観・世界観に新たな補強を加えつつ、その正統をまっすぐに受け継いだものと言うことができるでしょう。

原子論の思想はしかし、このようにプラトンから強力な哲学的批判を受け、さらにアリストテレスからも反論され、そのアリストテレスが権威をふるった中世を通じて無視されながらも、先述のような人間の生物的生存の本能と合致するその直接的な説得力を強みとして、しぶとく生き残り、近世に入って勢力を挽回することになります。

近世初頭、ガリレオ・ガリレイなど自然哲学の新たな担い手たちが直接相対した自然像は、中世においてキリスト教の立場から修正されながら基本的には権威をもちつづけた、アリストテレスの自然像でした。

アリストテレスによる宇宙のイメージでは、「形相 \parallel 現実態」と「素材 \parallel 可能態」という彼独自の概念にもとづきながら、「形相 \parallel 現実態」の達成度に応じて、永遠の円運動を行う天上の天体界と、火・水・気・土の直線運動からなる「月下」の生成消滅の世界とが、截然と区別されます。しかしこれは当然、はっきりと否定されます。天体の運動も、地上の物体の運動も、どちらも慣性に従った直線運動であることに変わりはないことが、明らかになったからです。

こうして長らく支配的であったアリストテレスの自然像は——「熱い」「冷たい」などの感覚される性質の説明原理である実体的形相の観念を含めて——斥けられ、代って、〈物〉を基本に置く原子論の自然像——けっしてすんなりとはなく、紆余曲折の末ですが——採択されることになります。

近世初頭、十五世紀ごろから十六、七世紀にかけての時代は、古代原子論の思想をきわめて雄弁に歌い上げたルクレティウスの『事物の本性について』全六巻の写本が発見されたり、ルクレ

テイウスが範と仰ぐエピクロスの原子論を述べた手紙が再発見されたりして、中世ではほとんど知られていなかった原子論が、活発にリバイバルした時代でした。もともとこの原子論の思想は、先に申しましたように、人間の生物的生存と行動の直接的な有効化の本能に合致した、それゆえに事象の説明にきわめて有効で説得力ある思想でありますから、大へんしたたかな生命力をもっているわけですね。

こうして、以後の自然学の主流は、「物」としての構成要素の時間・空間内における配置と組合せと運動」というその基本的な自然像を、プラトンの数学的手法によって正確に記述し、ますます精密化して行くという路線をとることになり、精巧な機械時計がモデルとなるような「物」を部品とする機械としての自然像、いわゆる機械論的自然観が形成されることになりました。

機械には当然、一定の計画に従ってそれを作った作り手がいるはずです。十七世紀ごろまではニュートンをはじめとして、自然科学者の多くは敬虔なクリスチャン（プロテスタント）であり、ちやうど聖書を読んで神の心を知ろうとするように、精巧な機械としての自然を研究することによって、その創造主である神のデザインと意図をそこに読み取ることができると、と考えていました。

しかし十八世紀の啓蒙思想の時代をへて、そのような意識は——少なくとも、自然研究者の研

究者としての建前としては——しだいに稀薄になり、その意味でセキュライズ（世俗化）された自然学者たちのあいだには、次のような研究上の戦略が、自然学者が従うべき綱領として定着して行きます。

その戦略ないし綱領とは、まず基本に据えられた自然像に沿って、目に見え計量の対象となる〈物〉の局面だけに着目して、それ以外の魂とか生命プロパーとかいった、つまりギリシア人がプシューケーと呼んだもの、またそれに関連するさまざまな価値のことは、一切考慮の外に置くこと。

このことはつまり、〈物〉の局面という、良い悪いなどの価値と切り離された「客観的」な事実を、同じく没価値のないし価値中立的（value neutral）な態度で研究すること、あるいは、実践的な連関を断ち切って、ひたすら知識のための知識を求める、ということにもなりますね。かつてアリストテレスが初めて、「観想」（*theoria* → *theory*, 理論）と「実践」（*praxis*）とを厳しく区別したのですが、近世の自然研究者たちは先に述べましたように、アリストテレスの自然学そのものは斥けましたけれども、学問研究は純粹の観想的・理論的な営為であるべしという、この綱領は受け継いで、むしろそれを強化したのです。

このような研究態度は、同じく実践への顧慮を切り捨てた純観察者の立場から、研究の視野をできるだけ精査可能な範囲、自分で責任をもった目配りができる小範囲に限定する態度に自然に

つながり、学問の専門的細分化を促すことになるでしょう。研究者は固有の方法と固有の用語・概念をもつ一つの領域のことに専念し、他の領域のことや、学問全体の中で持つ意味とかいったことには一切脇目をふらずに、専門主義的忠実に徹しなければならぬという考えが定着して行きます。こうして、十九世紀の中ごろまでには、学問領域の堅固な「専門分化構造」ともいふべきものが確立されました。

このように学問の専門分化構造が形づくられたことの一番基本にあるのは、自然学が哲学から独立したことでありました。そのことを象徴するのは、一八三四年、それまでは英語になかった「サイエンティスト」(scientist)という言葉(もちろんサイエンスという言葉はありました)が、「物質世界についての知識の探求者」という特定の専門研究者集団を指す言葉として、新しく造語されたことでしょう。それまで、例えばニュートンの名著『自然哲学の数学的諸原理』(Philosophiae Naturalis Principia Mathematica, 1687)にしても、ジョン・ドールトンの化学的原子論の大著『化学哲学の新体系』(New System of Chemical Philosophy, 3 vol 1., 1808-27)にしても、いずれも書名に「哲学」という語が使われていることからもうかがわれますように、自然研究は自然哲学の中に組み込まれるべきものと考えられていました。それが十九世紀の中ごろになって学問の専門分化が進んできますと、「英国サイエンス振興学会」(British Association for Advancement of Science)という学会に参集する自然研究者たちを「自然哲学者」と

呼ぶのは実情に合わなくなったため、新しく「サイエンティスト」という言葉が造語されたわけです。

さてしかし、ここで注意しなければならないのは、いま申しましたような、自然科学研究における価値中立主義、実践的連関の切り捨て主義にもかかわらず、およそ人間の学問的営為にとって、あらゆる価値、あらゆる実践的連関と最後までまったく無縁であるというようなことは、ありませんということです。

特に、近代の自然学が古代の原子論から継承した、〈物〉の局面だけを抜きがきした自然像の場合は、構成要素あるいは「部品」である〈物〉を手がかりとして、自然的対象を操作し、改変し、あるいは自然には存在しないものを新しく作り出す可能性、そういう広義の実践にほかならない「技術」への応用の可能性を、もともと強く内包しているのです。この可能性はしだいに現実化されて、今日われわれが見るような「科学技術」へと発展して行くことになります。

四

さて、日本が二百年以上にわたる鎖国を解いて、西洋の学問を積極的に摂取し始めたのは、まさに十九世紀の半ばのころであり、つまり、西洋においてギリシアに始まる学問の伝統がほぼ以上のような経緯を経て、いま申しましたようなあり方をとるに至っていた時期に他なりません。

すなわち、学問ががっしりした専門分化の構造を形成するに至った時期、他方また、特に自然科学（physics＝物理学）が基本に据えた自然像に内包される技術化の可能性が、ようやく現実化に向かうきざしが現われてきた時期、ということです。

ラテン語の *scientia* から来たサイエンスという言葉には、本来、知識とか学問といった一般的な意味はありませんが、日本ではこれに、「科学」、つまり「科」の学という訳語が当てられて定着しましたのは、ちょうどこの時期における西洋の学問の専門分化構造——さまざまの学科目に分かれている構造——に由来し、「サイエンティスト」（まさしく「科学者」）という言葉が新しく造られたような状況を反映していると思われまます。

きょうのお話のはじめに見ましたように、この時代の日本の知識人、特にやがて維新の担い手たちにつながる知識人の学問観は、「実学」の尊重ということでありました。すなわち、直接すぐに役立つ学問をこそ求めなければならないという思想であって、日本はこのような思想のもとに、新しい西洋の学問を取り入れ始めたのです。

取り入れる側の日本のこの実学思想と、取り入れられる西洋の学問そのものがちょうどこの時期にとっていた、先述のような性格・あり方が、互にびつたりと呼応しあったこと、よくマッチし合うものであったこと、この点が重要であると私には思われます。

まず、西洋の学問（サイエンス＝知識）の最先端は、この時期、母胎であった哲学という全一

的な知の追求との絆を断ち切って、日本において「科学」と訳さなければならなかったような、特定の専門的なあり方をとっていました。だから日本は実学思想のもとに、母胎のことは無視して、最先端部分の「科学」だけを熱心に学べばよかったです。

さらにまた、その最先端の自然科学の基礎に置かれた自然像は、先に申しましたように、対象をコントロールし、改変し、新しい物を作り出すための技術と結びつく可能性を内包していて、その可能性が実現し始めていました。今日の「科学技術」の揺籃期です。これも先にちよつと触れたと思いますが、もともと〈物〉にのみ着目したこの自然像は、人間の生物的生存と行動の直接的な有効化というモチーフが描き出した描像なのでありまして、ですから、これに基づく科学技術は、同じそのモチーフを現実的に追求して、できるだけ効率よく、便利で快適な環境条件を人工的に作り出すことによって、人間の生存と行動のために直接役立つことをひたすら目ざすものであります。これほど、日本側の「実学」の思想とぴつたり呼応し合うものはないでしょう。

その「実学」の思想を奉じる幕末・明治の人材たちが、今日ではほとんど見られないような、文武両道にわたる硬質の素養を身に着けていたことが大へん印象的であると、最初に述べました。この硬質の素養の芯となっていたのは、古来脈々と伝わる日本の伝統的な心性と精神であるといえるでしょう。それを恃みとして、西洋の学問から実益と直結する「実学」的な先端部分だけを

ひたすらに摂取する——この「魂」と「才」との明確な役割分担が、「和魂洋才」ということであります。

「西法の教理を鎔かし、皇朝の型模に入れる」とも言われました。「型模」とは鑄型のことです。日本の伝統的精神と文化を基本枠として、その中に西洋の科学を取り入れるということ、「和魂洋才」と同じような意味になるでしょう。西洋の学問にも、その伝統を培った「魂」があり、「科学」の母胎（マトリックス）としての「型模」が確在するのですが、彼らの目はそこへは向けられませんでした。いたしかたなかった、といえます。いま申しましたように、西洋の学問そのものが、この時期、そのような扱いをすんなりと受けつけやすい状態にあったのですから。このようにして、西洋の学問にはもっぱら、実益と有用性だけを求めるといふ姿勢は、その後も明治の世に受け継がれて行きます。学問の府としての大学も、「国家ノ須要ニ応スル學術技芸」（帝国大学令第一条）、つまり「国家有用の学」の修得機関であるという理念が高らかにうたわれました。明治十年（一八七七年）に創設された東京帝国大学には、実用の学の一つの典型である工学部（工科大学）が置かれることになりました。これは実に、総合大学としては世界にまったく前例のないことだったので。ちなみに、明治三十年（一八九七年）に設立されました京都帝国大学も、同年まず理工学部（理工科大学）が、ついで二年後の明治三十二年に法学部（法科大学）と医学部（医科大学）が開設されるといように、まさに「国家有用」の実学的学問から出

発しています。その後京大創設から九年もたつて（明治三十九年）やっと、文学部（文科大学）が出来る運びとなるのです。

はじめのほうでふれましたように、日本は十九世紀の中ごろ（一八五七年）に長崎の伝習所におきまして、西洋医学の基礎学科から臨床教育までの知識を体系的に学びました。

〈物〉の局面だけに着目する戦略の直接的な有効性は、医学・医療の領域では特に顕著であるといえるのではないでしょうか。何となく身体がだるいという状況があるとき、状況のままではこれに対処するよりも、その状況の原因（アイティオン＝ギリシア語で「責任者」）をウィルスとかガン細胞といった〈物〉の形で同定して、それを撃つ、というやり方のほうがはるかに速効性があります。あるいは、人体を臓器という〈物〉としての部品からなる機械とみなして、いたんだ部品を見定めて修理する——さらには、もはや修理がきかない場合には新品と取り替える（移植する）——というやり方も、直接的には——つまり、大局的また最終的にはいざしらずとも——手っとりばよい病気への対処法であることに間違いありません。

日本人は西洋のこうした「科学」的な医学医療の有効性にすっかり脱帽したとみえまして、明治二十八年（一八九五年）には、「漢方医学廃止の帝国議会決議」という決議を行っているのですね。わざわざ議会で決議してまで漢方を廃止しなくても、と思うのですが、西洋医学とくらべて漢方のやり方が、よほどまどろしかつたのでしょうか。

いずれにせよこのようにして、日本は「富国強兵」の掛声のもとに、「魂」のほうは和風でまかなうことにしまして、西洋の学問からは、ちょうどその時期における西洋の学問のあり方と呼応しつつ、有効性と実益に直結するその先端部分だけを熱心に取り入れ、ひたすら「近代化」の道をつき進んで行ったのでした。

五

目標はかなりの程度に達成されたといつてよいでしょう。日本は急速な勢いでとにかく近代化に成功しましたし、また「富国強兵」という掛声についていえば、日本がほんとうに「富国」となることはさし当っては困難であったとしましても、「強兵」のほうは一応実現されました。私が小学校の下級生のころには——私は昭和七年の小学校入学ですが——「世界五大強国」（米・英・日・仏・伊）とか「三大強国」（米・英・日）という言い方をよく耳にしたのを憶えています。

その行き着く先で、日本は第二次世界大戦によって、一度叩きのめされました。そして、その後は、「強兵」のほうはきれいさっぱりと諦めて、もっぱら「富国」を目ざして邁進してきたわけです。

その間、日本が幕末以降あれほど熱心に摂取した「実学」としての西洋の科学と技術——「西

方の教理」——は、戦後今日までに、強大な「科学技術」のシステムをつくり出すに至りました。それを基盤装置として日本は、経済成長という至上のポリシーを遮二無二推し進めまして、いわゆる「経済大国」となったわけです。この点に関するかぎりでは、たしかに、日本が当初「洋才」に期待した効果は、所期以上に達成されたといつてよいでしょう。

しかし、実態はどうなのでしょう。

まず、そのような「洋才」を補完すべき「和魂」は、どうなったのでしょうか。もちろん、日本人としての特有の習性やメンタリテイのよなもの、以前と変わらず、したたかに存続しています。しかし、特に戦後になってからの教育と世相の移りかわりのなかで、かつて高杉晋作たちに見られたような、明確な形をもった文武にわたる硬質な素養は、解体してしまつたかに見えるのですが、それと連動して、その背後にあった「和魂」と称すべきものも、どこを探してもあまり見当りませんし、一般にはどうやら消散してしまつたように思われます。もう一つの「西法の教理を鎔かし、皇朝の型模に入れる」という言葉に寄せて言いますと、鑄型と特んだ「皇朝の型鑄」のほうに先に溶けてなくなつてしまつたのです。

そうすると、魂も鑄型もないとすれば、実益の思想はただの金銭至上主義と化するほかはありません。利益を貪欲に求めたあげく、あぶく（バブル）を掴むことになるのも不思議ではないでしょう。

さらにまた、経済成長のための基盤装置とされた科学技術が、ますます加速しつつここまで進展してきました結果として、多大のプラス効果の反面、それに伴うマイナスの波及効果や深刻な問題が、さまざまな場面で顕著になってきたということがあります。改めて申すまでもなく、地球規模での自然環境破壊や、核兵器などの大規模殺戮の手段の開発、また臓器移植その他の、極度に発達した延命の医療技術が引き起す倫理問題、等々がそれです。

このようにして、「和魂」はすでに消滅し、「洋才」の行き着いた科学技術の動態が、さまざまな深刻な問題を引き起すようになったとすれば、われわれはどうすればよいのでしょうか。

いまさら、失われた「和魂」をいたずらに惜しんで嘆いてみても仕方ありません。ここでは、日本が「洋才」として取り入れた西洋の科学技術がもとと内包していた問題点のことを、もう一度考えてみたいと思います。

もともと、科学技術とは、くり返し申しますように、その本性上、ひたすら人間の生物的生存と行動の直接的な、さし当てる有効化を追求するものでありますから、その点での絶大な恩恵の反面、間接的あるいは最終的にどのような副作用的な波及効果がそこから起るかは、保証のかぎりではありません。また、その基礎にある古代原子論以来の〈物〉一元の自然像は、魂や心やそれに関連する諸価値を基本的に排除しているわけですから、それに基づいて科学技術を闇雲に押し進め、〈物〉の局面での有効性という単一の価値だけを貪欲に追求して行くならば、いつかは

必ず、基本から排除されていた魂や心にかかわる精神的・倫理的な諸価値と抵触する事態が起つてこざるをえないはずなのです。現代の状況は、まさにそのことを告げています。

日本は「和魂洋才」という建前のもとに、西洋の学問からそのような本性をもった先端部分だけを、切り花のように、その母胎と大体の根から切り離して取り入れたのでした。ちなみに申しますと、わが国では驚くべきことに哲学の領域においてすら、最先端至上主義といえますか、大本の根を顧みず西洋の最新流行の思想だけを有難がって熱心に勉強するという傾向が、明治以来ずっと今日まで、依然として支配しています。

それはともかく、きょうは「和魂洋才」という題から申しますとバランスを失するぐらいに、西洋の学問の歴史をわざわざ古代ギリシアにおけるその淵源にまで遡って、いくらか詳しく見てまいりましたが、それは特には、いま申しました意味において問題の根源にある〈物〉一元の自然観、生命や魂までも〈物〉としての構成要素に還元してしまう自然観が、西洋の学問の淵源そのものにおきましては、きわめて特殊で異端的な自然観であり世界観であるということをしつかりと確認しておきたかったからであります。

はじめに名前を出しました最初期のタレスやアナクシメネス以来、哲学の伝統の中ではおそらくこの原子論を唯一の例外として、少なくともアリストテレスが出るまでは、自然万有の窮極の基本原理がプシューケー（生命、魂）であることが疑われたことはありませんでした。このギリ

シア本来の自然観・世界観は、表現こそ違え、洋の東西を通じて共通するところの多い、普遍的なものではないかと思うのですが、おそらくはこれが、人間のもつ本源的な自然観・世界観と称すべきでありましょう。

他方、近代自然科学が古代原子論から受け継いだ、〈物〉としての構成要素を窮極の基礎とみなす自然観のほうは、十九世紀の末以来、当の自然科学が量子力学へと進展して行くなかで、根本的にその資格を疑われるに至っています。自然万有の窮極の基礎はもはや〈物〉であるとは無条件に言えなくなり、〈物〉の局面だけを抜きがきした機械論的自然観は、日常生活と古典力学の世界では一意的な自明性をもつかに見えませんが、世界の窮極的なあり方と合致するものではないことが、すでに久しい以前から公認されていることはご承知のとおりであります。

そのことの認定に大きく寄与したウェルナー・ハンゼンベルクが、「現代の自然学は決定的にデモクリトスの原子論に反対し、プラトンの側に立つ」と言いましたように、いま自然万有の基本的描象は、先に見ましたプラトンの洞察したところに近くなつたのです。

そうといたしますならば、そして他方、それにかかわらず現代の科学技術は独走を続けて、先述のような危機的と言つてよい状況を現出しつつあるとすれば、われわれはいまこそ、日本では顧みられることの少なかった学問の淵源に見られる、人間にとつての本源的な自然観・世界観を、現代の新たな諸条件のもとで回復することを志向すべきでありましょう。それは、〈物〉が基本

とされたがゆえに自然像の基礎から排除されていた生命や魂を、何らかの仕方でも復権させる努力をすることにほかなりませんが、しかし〈物〉の局面を全面否定することではなく、回復された本源的自然観のなかに、それを相対化して位置づけることを意味します。

淵源にあったこの本源的自然観・世界観こそは、西洋の全学問を生み出した母体であり、その伝統を培った「魂」なのであります。人間の生き方への決意、倫理や道徳の基本もまた、そこにこめられていました。そして、ちょうどその本源的自然観・世界観が、洋の東西を通じて共通するところが多かったのと同じように、「魂」そのものには本来洋の東西の区別はなく、外に現れる形は違って、「魂」が「魂」であるかぎり、その内実は必ず呼応し合うはずでありましよう。

いまは、「和魂」と「洋才」という、あまりに明確すぎる役割分担に代えて、このような意味での「魂」をこそ、わがものとすべき時ではないでしょうか。

御清聴を感謝いたします。

(京都大学名誉教授・京都国立博物館長)